

< もくじ >	
1. 2019年度定時総会・第18回大会開催日と概要のお知らせ（再掲）	1
2. 定時総会の招集、出欠確認・委任手続きの電磁化について	1
3. 研究会からのお知らせ	2
4. 各研究会の概要報告	2～5

1. 2019年度定時総会・第18回大会開催日と概要のお知らせ（再掲）

(1) 2019年度総会・第18回大会の日程・会場について

1) 開催日時：2019年6月15日（土）

（開催概要 第一部《総会》：10時～、第二部《大会》：11時30分～）

2) 開催場所：駒澤大学（駒沢キャンパス 教室など詳細は未定）

（東京都世田谷区駒沢一丁目23番1号、東急田園都市線駒沢大学駅下車徒歩8分）

会場は、昨年同様駒澤大学駒沢キャンパスとなります。今後のJAAS Newsで新しい情報をお知らせいたしますので、総会・大会の会場のお知らせには十分ご注意ください。

(2) 2019年第18回大会のテーマについて

1) 大会テーマ：「(仮) 持続可能な超高齢社会の条件～地域コミュニティのSDGs～」

※SDGsとは、2015年9月に国連で開かれたサミットの中で決められた、「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称であり、国際社会共通の目標です。

2. 定時総会の招集、出欠確認・委任手続きの電磁化について

事務経費節減、および会員の皆様の負担を少なくするため、定時総会の招集、出欠確認・委任手続きに電磁式（メールならびにWEB 回答）を加えることを、2018年度総会にて決議いたしました。

電磁式では、招集状ならびに議案書をメール添付でお送りし、出欠確認・委任手続きはシニア社会学会で準備したWEB ページで登録していただくこととなりますので、メールをパソコンあるいはスマートフォンで受信できる方が対象となります。

回答方法は、画面のボタンにチェックを入れるだけの簡単なものになりますので、メールを使える方はぜひご協力ください。なお、従来通りハガキでの回答をご希望の方は、郵送料（切手）をご負担いただくこととなりますので、ご了承ください。

JAAS News をメールで受信されている会員各位には、2019年度では従来式と電磁式どちらを選択するか、3月22日に確認のメールを差し上げます。確認メールの返信期限は4月10日とさせていただきます。電磁式を選択された会員には、5月にメールで定時総会招集を通知いたします。

なお、確認メールに返信をいただかなかった会員の皆様は、電磁式を選択されたものとさせていただきますので、ご了承ください。

3. 研究会からのお知らせ

(1) 第10回「ライフプロデュース」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時： 2019年3月22日(金) 18:00~20:00
- 2) 場 所： 内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ 9F ラウンジ
- 3) テーマ： 読書会『ネガティブ・ケイパビリティ～答えの出ない事態に耐える力』
(帚木 蓬生著) 朝日選書
- 4) 参加費： 500円

※ お問い合わせは中村 (nakamura@jass.jp) までお願いいたします。

(2) 第117回「社会保障」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時： 2019年3月27日(水) 18:00~20:00
- 2) 報告者： 金 貞任(東京福祉大学教授)
- 3) テーマ： 「日韓の単身要介護高齢者の介護状況と看取りケア」
- 4) 会 場： 日本労働者協同組合連合会 会議室
豊島区東池袋1-44-3 池袋ISPタマビル 8階

※ご質問がございましたら、阿部(旧姓佐藤)まで。

090-4436-6853 fujiko-s@jeans.ocn.ne.jp

(3) 第64回「シニア社会のリテラシー」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時： 2019年3月28日(木) 15:00~18:00
- 2) 場 所： 早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) テーマ： <発表と討議> 井上智弘著『人工知能と経済の未来』(文春新書刊)を読み解いて、課題を深掘りする
- 4) 報告者： 安田 和紘(研究会コーディネーター)、薄井 滋
- 5) 参加費： 300円

※ お問い合わせは、島村 (ken-sima1941@jcom.home.ne.jp) までお願い致します。

(4) 第55回「災害と地域社会」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時： 2019年4月24日(水) 18:00~20:00
- 2) 場 所： 早稲田大学戸山キャンパス39号館(会議室未定)
- 3) 報告者： 松村 治(会員、早稲田大学人文総合科学研究センター招聘研究員)
- 4) テーマ： 「原発事故から8年たった東雲住宅(江東区) —その間の避難者の動向—」
- 5) 参加費： 当分の間頂戴しません。

※ お問い合わせは、福原 (fukuhara@jaas.jp) までお願いいたします。

4. 各研究会の概要報告

(1) 第9回「ライフプロデュース」研究会の報告

- 1) 日 時： 2019年2月22日(金) 18:00~20:00
- 2) 場 所： 内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ 9F ラウンジ
- 3) テーマ： 「老後の目的は『人生の仕舞い(終い)方』『仕上げ方』、あなたは？」
- 4) 参加者： 7名。(70代から50代まで、女子2名、男子5名)

このテーマを提案した70代の男性は、長く壮絶な闘病生活を支えた末に、8年前に直腸がんで逝った妻との終焉前後の体験がその根底にある。人生の仕舞い方、仕上げ方の線引きは曖昧だが、双方同じ意味だとも考えている。既に延命治療の拒否などを含めたエンディングノートは作成済み。死後は妻と同じ北欧の湖水への散骨を、妻の時に同行した息子に託していると語る。

他の参加者はまだ、仕舞い方までには考えが及ばず、その前の「仕上げ方」、つまり今をどう生きるか?に話題が集中。だが時間切れで、ただ一人の方が未発言のまま終了せざるを得なかつ

たのは残念であった。

小学校英語教師の補助教員と各種ボランティアに励む女性は著名なデザイナーだった叔母の遺品整理を経験、人生の無常さを知る。まだ「自分の仕舞い方までは…」と思案中だが、かつての仕事のキャリアに感謝しながら、子ども達との接触に充足感を味わっている。70歳近い男性は「人世をどう生きるか？今やりたいことを真剣にやればいい」（吉沢久子）に共感。お金、時間、健康、仲間づくりにも、“心の断捨離”を心掛けている。実際には賀状交換や新年・忘年会参加を止め、自分なりの距離を保って付き合いたくない人とは付き合わない。「自分のやりたいことをやって死を迎えたい」が望みである。

50代の女性は、祖母、父、兄と家族の亡くなり方を多数見てきた。それぞれが、家族のみんなに鮮明な記憶を残してゆく。仕事上でも数多くの人々の亡くなり方を見てきたが、死後の相続を巡る骨肉の争いも数知れない。「孤独死からは、最低限の人間関係を保っておかないと」が実感。そんな経験から、既に遺書、エンディングノートも書いてある。今、死んでも幸せだと思いつつ生きていきたい。やはり50代の男性は、仕舞い方はまだピンと来ない。現在は、87歳の母のことと、親の残した土地と家をどうするかが当面の課題。現在、頼まれた本を書いているが、自分の理想の最期は、自作を書いている最中に死を迎えることかな。

70代の男性は、漠然としか考えていない。延命治療、医療の問題なども、トータルでの充実があればいいと思っている。今は、自立と自律ができることを目指している。自分がどれだけの人の心に残るのか？人の心に残る生き方をしたい。興味深い色々な人々と関わり合いたいな。

※この月例会の詳細は、未発言者の意見も補足してある「ライフプロデュース」研究会のブログをご覧ください。
(皆川記)

(2) 第116回「社会保障」研究会の報告

- 1) 日 時： 2019年2月27日(水) 18:00~20:00
- 2) 報告者： 西下章俊(東京経済大学教授)
- 3) テーマ： 「介護保険・ケアマネジメント・コミュニティケアの日韓比較」
- 4) 会 場： 日本労働者協同組合連合会 会議室

東池袋1-44-3 池袋ISPタマビル 8階

まず長期療養保険の要介護認定のランクについて、日本と比べて、韓国では、重度の要介護者(1等級)の占める割合がかなり低いこと、軽度者の認定が多いことが数字で示された。20歳から始まる保険料が安いので、保険という風呂敷が小さいことが特徴である。韓国には、各自が個室をもつスウェーデン式の認知症グループホームが存在しないのに、グループホームとして紹介する研究者がいることが指摘された。韓国独自の制度としては、「家族療養保護費」がある。これは療養保護士(日本のヘルパー2級程度)の資格を持つ家族が、配偶者や親を介護する場合に、一月20日間、90分という条件下で療養保護士の仕事として認められるという制度である。この制度は、以前は療養保護士の資格を取る動機付けになっていたが、10年を経た現在、介護の社会化という観点からこのシステムを再検討すべきである。

次に、韓国にはケアマネジャーが制度化されていないにもかかわらず、この10年間、何故制度が存続できたかについて説明があった。近い将来、韓国型の2元ケアマネジメントのシステムが導入されるようだが、その担当組織を巡って議論が分かれている。

第3に、韓国では、包括型コミュニティケアを積極的に進める計画があるが、長期療養保険の保険者になりえなかった地方自治体が、ハブになり得るのかという問題がある。日本の地域包括ケアでは保険者としての市区町村が重要なハブとして位置付けているのとは対照的である。また、韓国全土に広がる「敬老堂」(約65,000か所)を有機的にコミュニティケアに組み込むことの重要性について指摘があった。なお、韓国では、3年以上勤務する介護職員に対して長期勤続手当が2017年から支給されている。日本にはない「家族療養保護費」や「敬老堂」をめぐる、参加者との間に活発な議論が展開された。
(西下章俊・袖井孝子 記)

(3) 第63回「シニア社会のリテラシー」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年2月28日（木）15：00～18：00
- 2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) テーマ：〈問題提起〉シニア社会における「人工知能（AI）」について ～ 井上智弘著
『人口知能と経済の未来』（文春新書刊）を読み解いて
- 4) 発表者：島村 健次郎、安田 和紘（研究会コーディネーター）

島村さんは、人工知能（AI）の発達が未来において経済成長や雇用にどのような影響を与えるのかを論じ考えることを当著書は主題にしていること。そして、私たちは著者が主張するところを検証することから始めることではないかと思うと述べた。

安田さんは、「AI」とは何かを論じ、当著書は2つの問を立て2つの答をだしていること。1つはAIが仕事を奪うという問題が生じること。2つ目はAIが普及した世界では「ベーシックインカム（BI）」が不可欠な制度であること。私たちは筆者が論じていない社会のあり様など研究課題を論じるべきであるとまとめた。

濱口座長は、AIが発展している今、一番関心を持っていることは、人間は一体どうなるかということであり、哲学（形而上学）が必要であり今後は哲学の時代になるのではないかとコメントされた。（島村記）

(4) 第29回「シニアのICT活用研究会」の報告

- 1) 日 時：2019年3月8日（金）14：00～16：00
- 2) 場 所：ダイヤ高齢社会研究財団会議室
- 3) 報告者：茨木 裕子（早稲田大学人間科学部通信教育課程 教育コーチ）
- 4) テーマ：「中高年者の社会参加活動と情報活用について」

所沢市で実施された1196人の40歳以上の男女へのアンケート調査の分析からお話をいただきました。

分析テーマは、1. 老後を意識した行動や情報活用と社会参加活動との関連、2. 個々の社会参加活動と情報源の活用の関係、3. 情報不足感の違いによる情報活用の特徴、の3つです。結果は、1. 人を介しての情報の紹介と公的地域情報（広報誌や回覧板）を活用している、2. 年代や社会参加活動の内容によって異なった情報源が用いられている、3. 高齢になるほど利用する情報源が増加し、同じ年代では情報不足感の違いにより利用する情報源が異なっている、ということでした。

これらから、年代や活動内容に応じた情報提供手段の選定が必要、社会的ネットワークの構築と身近な情報提供者を増やすこと、情報発信での創意工夫、ICTの活用による情報取得機会を増やすこと、が求められるとまとめられました。（森 記）

澤岡座長の「シニアのICT活用」研究会は、2年間のお休みを挟みながら2012年9月から本年3月まで29回開催してまいりましたが、3月16日の第5回研究会合同シンポジウムを集大成の場とし休会いたします。

(5) 第54回「災害と地域社会」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年3月15日（金）18：00～20：00
- 2) 場 所：早稲田大学戸山キャンパス39号館5階第5会議室
- 3) 報告者：野坂 真（早稲田大学助手）
- 4) テーマ：「災害復興の次の段階への移行期における地域文化の再構築」—岩手県大槌町における地域アーカイブ活動の事例報告から地方の復興で何が重要かを考える—

岩手県大槌町で長期にわたって、現地調査とインタビューを通じて研究活動を行いつつ、現地の安渡地区での復興活動に直接かかわっている野坂さんは、ここ数年安渡地域の人びとが震災以前から保持していたさまざまな資料や震災後に発見された資料を収集・分類・整理・展示する、地元民グループ中心の「地域アーカイブ作業」に、アドバイザーとして取り組んできている。

野坂さん自身の復興過程の分析によると、現段階から2020年頃の安渡地区では、大槌町の復興という非日常であった時期が一段落して、ある程度まで比較的安定した日常生活へ移行する時期を迎えるという。しかし、震災復興が震災前のあるいは震災後の地域コミュニティ構想に結びつかないままばらばらに進行し、しかも建物優先で人びとの「生きる力」や「つながり」に結びついたまちづくりになっていないことに大きな問題があったとしている。東日本大震災での津波被害を経験した後で、戦後のこの地域の発展の歴史的経緯を振り返ると、震災でそれが解体され、不揃いに進行する復興過程で過去との断絶が起きていることを踏まえ、現在直面している問題と課題を検討していくなかで、「地域文化の再構築」という課題が浮かび上がるという。

その上で、アーカイブ化してきた資料が、今後いかなる意味を持つのかを検討して報告された。その結果、地域住民は、それらの資料を目にすることで過去の記憶を振り返りお互いに語り合うコミュニケーションの機会を高めることになるという。それはこの活動が、行政主体のアーカイブ活動や個人ベースのアーカイブとは違って、地域の住民グループ中心に行われているからであり、継続可能性があり、多くの人を巻き込む可能性を持つという。復興過程から新たな段階へ移る安渡地区にとって、このようなアーカイブ活動が、まちづくりのテーマの絞り込みや、過去の地域コミュニティ構想とこれからの構想とのバランスを図る上で重要な意味を持つとまとめられた。

参加者からは、復興過程の一段落と次の段階への移行をどのような指標でみるのか、復興期以降の段階におけるアーカイブ活動の位置づけが見えにくいといった疑問も出された。（長田記）

一般社団法人シニア社会学会・事務局（月・水・金オープン）
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-27-4 ナカヤビル202
電話&FAX：(03) 5778-4728
eメール：jaas@circus.ocn.ne.jp URL：http://www.jaas.jp/